原告団

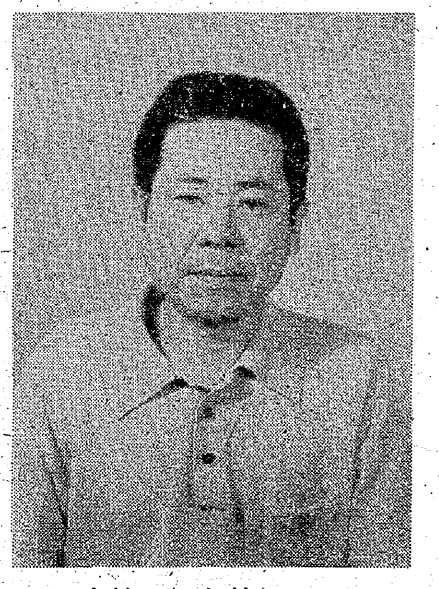
遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第七十五号

原告団レポート

遺族――

松島マスエさん



生前の松島義信さん

健康管理の責任負えん

患者を見殺しにする現在の医療体制

ますます鮮明さ加わる思い出

思わぬ急変

松島マスエさんは、三池の遺族の一人である。

もっとも夫の義信さんは、あの大爆発のとき犠牲となった人と違い、その後CO中毒症の苦しみと格闘しながら九年近くも生きつづけた末、世を去った人だ。

義信さんの死にざまは、悲惨をきわめた。

昭和四十七年八月の、ある朝のことであった。

出勤前のこと、便所を出て茶の間までやってくると、いきなりふらふら一つとその場に座りこんだ。顔色はなかった。

「どうしたとですか」、びっくりしたマスエさんが聞くと、息も絶えだえのように義信さんはいった――「血を吐いた」。

実は義信さんはすでに数日前からめっきり体調が悪化し、前の晩なども折角の夕食にハシさえつけず、早やばやと寝てしまったのであった。が、人もわれもこれがCO中毒症なのだろうとばかり思いこみ、そのまま過してきた。だから彼の急変に肝をつぶしたマスエさんは、あわててタクシーを呼び夫の体を大牟田地評曙病院へ。

そのまま入院となった。後でわかったことに、義信さんは仕事場の新港作業所（軽度のCO患者たちのために、三池労組の団結の力が勝ち取った造成職場）でも、何回か吐血していたのである。

いそぎ、開腹手術。だが医師はいったん開いておきながら、そのまま再び縫い合わせてしまった。

「子どもさんたちは、呼んでおく方がよいでしょう」

医師の言葉は冷たかった。胃潰瘍はともかく、肝硬変もも早や手遅れだったのである。

こうして義信さんは再び自宅に帰ることなく、それから数日後の八月十八日、血を吐きつづけながら息をひき取っていった。享年四十四歳。マスエさんの四十三歳のときのことである。

位碑の前で

マスエさんは、夫義信さんの死後も、それまで一心同体のように生きてきた三井鉱山鉱員社宅――荒尾市万田社宅宮坂町九棟の一隅に住んでいる。

今年四十七歳。もし生きていれば夫義信さんは四十八歳。「ほんとうですと、としの三十台四十台といえば、男として働きざかりでしょう。人間の生涯で一番大切なその時期を資本から奪われてしまって、CO中毒症のためにありとあらゆる苦しみに耐えた末、早やばやと世を去っていってしまったもので、どうしてもあきらめがつきません」、マスミさんの怒りの火は消えぬ。

子どもといえば、息子と娘がそれぞれ二人ずつ。娘たちはすでに他家に嫁ぎ、息子も一人は大阪で働いている。家には、町の一小企業につとめながら母親マスエさんをささえている、長男の清さん（29歳）と二人。マスエさんはもう、酷烈な世の職場に耐える体ではない。

信心深い実母の影響だろうか、彼女はお大師さんを信仰している。仏壇の前に座われば、しぜんに口をついて出てくる御経。

「――オン　アボキャ・ベイロシャナウ・マカボダラ　マニ・ハンドマ　ジンバラ　ハラバリタヤウン」

灯明に揺れる、故人の位碑にしるされた戒名は――「釈義道信士」。

夜風の中で

あの頃、松島マスエさんは天領町の三井病院に入院していた。英雄なき百十三日のたたかい、三池大闘争、その後の差別支配・不当な合理化に対する反対闘争とつづいた思い出。ともすれば崩壊しかねない家計をささえ、自ら町の商店に働くうちにその過労がたたってか、やっかいな肺浸潤だった。

そんなマスエさんに、夫義信さんの被災は大打撃だった。

その日の三井病院は、すっかり野戦病院と化した。ぞくぞく担ぎこまれてくる重軽傷者に、爆発で発生した煤で真っ黒に汚れてしまったおびただしい死体。

病気のわが身を打ち忘れ、夫の訪れを待っては、冷たい夜風にさらされながら、深夜の病院玄関にいつまでも立ち尽していたマスエさん。

だれに聞いても、返ってくる言葉は同じだった――「絶望ですよ。あきらめなはったがよかですね。もう坑内には、生存者は一人もおらんです。私たちは今、死んだ人ばかり昇げよるとですけん」。

ほとんどあきらめていたマスエさんの前に、夫義信さんが姿を現わしたのはすでに翌る日の午前二時過ぎのことだった。

ついに断絶

義信さんの発病は、しばらくたってからのことであった。言葉がもつれるようになり、あれほど人づき合いのよかった人柄がガラリと変って、ことごとに人を避けては頭をかかえこみ、一日じゅう部屋の片隅にうずくまるようになった。

これはその後のことだが、CO患者に共通している感情の爆発が家族共同体を木っ葉みじんに打ち壊わしてしまった。

あるときなど、どんなことが原因となって彼の感情を触発したのか、まだ幼なかった男の子に向かってさえてきたマスエさん。夫の死後は、こんどは自分自身が生きてゆくために働かなければならないのである。

仕事は精肉屋さんでの下働き。斧見たいにでっかい包丁をふりあげては、硬いトリの骨をブッタ切らなければならないときなど体じゅうがこわばってしまい、さすがに二～三日は動けなくなる。

そんなとき思い出されてくるのが、被災前健康だった頃の工夫の人間像。

彼は野球に身をうちこみ、自ら野球チームをつくってはよく試合に出かけ、優勝の賞状をもらって帰ることが少くなかった。

地域の少年野球の育成にも情熱を注ぎ、かねて揃えていたユニホーム、スパイク、バット、グローブなどの野球道具をいつくしんだ。

うたが好きだった。村田英雄、北島三郎などの歌などほとんどおぼえていてうたい、どこで入れるものかよくテープに吹っこんでいたという。

無類のテレ屋でもあったが、何といっても見逃がせぬことは、彼は詩人であった。その遺作のなかでもみんなから愛されたものに、「銀婚の妻へ」の長詩がある。

これからもつづけなければならぬCO闘争
すぐにこたえの出ることのないたたかいだが
かあさん　二人しっかり
力を合わせてがんばってゆこう

そう書いた詩人、松島マスエさんの夫義信さんは、この世にもういないのである。

くやしさ

義信さんは、翌三十九年の三月天領町三井病院に入院。たれの目にも、CO中毒症は疑えなかった。そのときすでに、「肝臓も悪くなっている」と告げた医師の言葉が、夫を肝硬変のためにうしなった今いっそう鮮明な記憶として、マスエさんの脳裏によみ返ってくる。医師は、なぜもっと人間の命と健康を守る責任者として夫の体に注意してくれなかったのか。マスエさんは、押さえ切れぬくやしさをかみしめる。

四十一年十月、そんな義信さんが多数のCO患者なかまとともに政府から、労災補償打ち切りの通告をつきつけられ、病院から放り出された。「症状が固定した」というので、その後押しつけられた障害手当は八万円ちょっとの一時金。かろうじて十二級だったとはひと過ぎた。

CO患者になってしまった夫の命を、もともと弱かった体を鞭うちながら、町の一商店に働きに出

血の警告

「CO患者ばかりでなく、労災被災者に対する補償も十分してもらわなければなりませんけれども、それにもまして大切なことはCO患者皆さんの健康管理ではないかと思います。私はCO患者の方を見るたびに、恐ろしくなります。あんたはガスを吸っとるげん、ということでとかく体調の変り方が見過ごされ勝ちの現状は、まるでCO患者を見殺しにすることでしかありません。資本が資本なら、会社や政府の医療体制も医療体制です。患者の立ち場に立つ健康管理体制。皆さん、もう一度考え直すべきではないでしょうか」

マスエさんの、これは血の警告である。

×

この欄の〝原告団レポート〟が静かに読者を集めています。どうか、読後のご感想でも寄せていただけばさいわいです。よろしく。

社宅の自分の家の玄関前に立つ松島マスエさん。思いがけなくも、未亡人と呼ばれる身になつてしまつたことが、いまだに信じられないふうな生活。玄関の上には今も、「松島義信」の名札が……。